

【目的】大動脈弁狭窄症(Aortic valve stenosis：AS)に対する経皮的動脈弁形成術(Percutaneous transluminal balloon catheter aortic valvuloplasty：PTAV)の術前検査のひとつとして、当施設では造影CT検査を施行している。造影CTで1心拍を連続撮影することより大動脈弁の動態評価が可能である。今回は4DCTによる大動脈弁評価とPTAVによる治療効果を比較し、大動脈弁の特徴を評価したので報告する。

【方法】対象は2013年よりPTAVを施行した5症例である。大動脈弁の動態画像収集には、ADCT装置(Area Detector Computed Tomography：ADCT)を用いて、ECG同期Volume ScanおよびContinues Modeを使用した。撮影したデータは、R-R間隔を5%ごとに再構成し、3次元構築装置で解析した。評価対象は、大動脈弁を左冠尖、右冠尖、無冠尖の部位に分け、石灰化の体積、石灰化の付着状態、弁の開閉角度、弁の癒着状態について調査した。PTAVの治療効果については術前後の圧較差測定による弁口面積を調査した。

【結果】PTAVで有効な治療結果が得られた症例は、弁尖の癒着がある傾向であった。

【考察】術前の4D弁評価より石灰化、弁開口の程度によってPTAVでの治療効果がある程度予測可能ということが示唆された。今後、スコアリング評価など検討中のものを含め、症例を増やして報告する予定である。

評価1	評価2	評価3	採否
発表日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分～ 時 分

受付番号

演題番号